

京都大学大学院経済学研究科 再生可能エネルギー講座
【部門B】第6回公開研究会（2022年11月28日）

西野報告

再生可能エネルギーの地域的浸透を考える

—市場経済下における社会資本整備の方向性の検討—

〈コメント〉

矢野修一

高崎経済大学経済学部

西野（2020）の意義①

- 詳しくは、西野（2020）の書評：矢野（2021）参照。
- 綿密な資料分析に基づき、戦前・戦後日本の農山村における**内発的な地域電化**の成立過程、それを可能とした各地域の**社会的・経済的条件**を明らかにした。
- 日本の電気事業史研究、さらには社会経済史研究の欠落部分を埋める成果。
- 日本の地域電化に対する通説：「一時的で希有な例外」「衰退を運命づけられた非効率なシステム」といった地域電化に対する評価は一面的に過ぎるし、事実誤認ですらある。
→ 「**大企業中心史観**」によって見過ごされてきた歴史的実態。

西野（2020）の意義②

- 中央集権的な電力ガバナンスの弊害、原子力による大規模発電・遠距離送電の非合理性と脆弱性を克服するためのヒント。
- **地域分散型小規模再生可能エネルギーシステム**の合理性と実現可能性を示唆。
- 「今日における電力改革のモデルの一つは、国家管理以前の日本の農山村に存在していたということになる。しかもそのモデルは、電力改革に留まらず、現代日本が欠いている地域主体の地域づくりのモデルともなり得る重厚な歴史を刻んでいた」
（西野 2020: 305）。

地主・小作制度下における 「内発的」地域電化

- 地域電化に向けた指定寄付金、出資など：逆進的追加租税の側面（西野 2020: 56-57, 88-89, 105）。
- 地域共有財産（経済的価値の高い部落有林など）による小作人・低所得層の個人負担の軽減など（西野 2020: 106-113）。
- **階級史観**（「地主的な地方自治」「名望家支配」「温情的小作人支配」など）で捉えきれぬか。
- 戦前日本社会の特性によって限界を画されていたとはいえ、地主、自作・自小作・小作農らが「**互いの地位や立場に応じた負担**を通して」「**地域電化を受益世帯全戸で成し遂げた事実**」（西野 2020: 293, 302）。

戦前の「自治的社会資本整備」の解説

- 「**離脱 (exit) ・ 発言 (voice) ・ 忠誠 (loyalty)**」モデル
(ハーシュマン 2005) による「解説」の試み。
- 地域に長く居住し、容易には「exitできない／loyaltyを有する」人々が金額の多寡、身分の差はあれ、自ら恩恵を受ける発電・配電事業に寄付や出資を行ってそれに責任を持って関与し、長期的に関心を持ち続けた。時に、村民大会などにおける（平等ではないにせよ）発言 (voice) の機会、僅かながらの配当などを得ながら、お互いが逃げようのない「公的 (public) 領域」における事業運営の効率化に努めた。
- 階級史観的分析には収まりきらない、**地域住民による「関与・受益・責任」の「普遍的」性格**の抽出。

日本地域電化史に学ぶ①

- 日本の地域電化：物質的基盤を前提に、地域住民による「**関与・受益・責任**」のシステムが機能する「**普遍的**」モデル。
- 「**住民出資による地産地消型のエネルギー自治**」の先駆的事例。
- 「**現代版電力公営化**」の可能性：たとえば、10電力から送配電部門を分社化した専門会社を「都道府県単位で買収し、都道府県民を組合員、あるいは株主とした公営配電組織を構築すればどうなるだろうか」（西野 2020: 295-298）。
- 「**新しい公共**」：出資によって醸成される「**共通の関心**」と「**当事者意識**」、地域の電気事業経営や電源選択、節電への責任感。市民への安価で安定的な電気供給、配電網管理に伴う雇用創出、自治体財政の基盤強化（西野 2020: 298-302）。

日本地域電化史に学ぶ②

構想されているのは、現代の病理とも言える短期利益至上の「**株主資本主義**（shareholder capitalism）」、棚ボタのみを期待する「**おまかせ民主主義**（delegated democracy）」とは異なる経済・政治ガバナンスである。出資を担いつつ権利を行使する「**ステークホルダー**（stakeholder）」による新たなガバナンスの形態を、**エネルギーコミュニティの理念と歴史的実践**に依拠しながら構想している。収益の期待できる事業を域外の民間大手に委ねることなく、「**おらが電気エネルギー**」によって、言葉本来の意味で「**持続可能な**」社会的紐帯を生み出すという理路である（矢野 2021: 83）。

共振する理念と実践

- 社会的共通資本：宇沢（2000）
- 域内経済循環：西部（2013）
- FEC（Food, Energy, Care）自給圏：内橋（2005）
- 連帯経済：ハーシュマン（2008）
- シュタットベルケ：諸富（2018）など。

→ **西野構想の普遍的可能性**

構想の壁は「技術」ではなく「権力構造」

• 「原発再稼働・新增設・期限延長」論：「ショック・ドクトリン」とともに。

と集器理才と能現性と係器央兵管イほ可が権一関兵中核給バ、の一集ジが核な、供かし化ギ央口題はうば一と視業ル中ノ問題によらギ力軽商ネのクなのなる風をの工こテ的術力るネ。一での、大遍技子すエるジ階型は巨普く原有やす口段生ののにな…保場障ノの再)は代も)び市保クそしたに現矢で略た一をテ(いつ流、ま中とギ力のたなか底う(強調う(ひル権型い型きのい(言…がネて散つ散大そとはる企が従域と…かう。か)「係家れ配と子中、た相1997: 217)「原にや自力の力略はと容れ」
：関国そ支な原(りっで木鐘いを、な池す…よあま(高警な術にき電まはさにこ(のれ技別太陽がさか力ど)郎切大は、太府か確配は三も巨とでか政確不支義る。仁ての有えとの不つし主い木っ型保うスどのもい主いて高切権ののまん性存在な民して

石垣りん「雪崩のとき」 (抜粋)

“すべてがそうになってきたのだから 仕方がない”
というひとつの言葉が
遠い嶺のあたりでころげ出すと
もう他の雪をさそって
しかたがない、しかたがない
しかたがない
と、落ちてくる

~梯 (2022: 98) ~

パウロ・フレイレ 『希望の教育学』 より

- ぼくは一方で、なんらかの形で具体的に発現している絶望を否認することはできないし、それをそうあらしめている歴史的・経済的・社会的根拠に目を塞ごうとも思わない。それでもなお、ぼくは、希望と夢を抜きにして、人間の存在を理解することはできないのである。希望というものを抜きにしたら、よりよく生きようとする人間の不断のたたかいは、理解できないものになってしまう。希望は人間の存在論的な必要条件なのだ。絶望、すなわち行方を失った希望は、この必要条件にゆがみが生じている、ということなのだ。絶望がプログラムとなれば、われわれは行動するバネを失って、宿命論に屈従することになる。さまざまな力を結集して世界をつくりなおすためにたたかうことは、もう不可能になってしまう（フレイレ 2001: 8）。

参考文献

- 宇沢弘文（2000）『社会的共通資本』岩波新書。
- 内橋克人（2005）『「共生経済」がはじまる—競争原理を超えて』NHK人間講座。
- 梯久美子（2022）『この父ありて—娘たちの歳月』文芸春秋。
- 高木仁三郎（1999）『市民科学者として生きる』岩波新書。
- 西野寿章（2020）『日本地域電化史論—住民が電気を灯した歴史に学ぶ』日本経済評論社。
- 西部忠編著（2013）『地域通貨』ミネルヴァ書房。
- A.O.ハーシュマン著／矢野修一訳（2005）『離脱・発言・忠誠—企業・組織・国家における衰退への反応』ミネルヴァ書房。
- A.O.ハーシュマン著／矢野修一ほか訳（2008）『連帯経済の可能性—ラテンアメリカにおける草の根の経験』法政大学出版社。
- パウロ・フレイレ著／里見実訳（2001）『希望の教育学』太郎次郎社。
- 諸富徹（2018）『人口減少時代の都市—成熟型のまちづくりへ』中公新書。
- 矢野修一（2021）「〈書評〉西野寿章『日本地域電化史論—住民が電気を灯した歴史に学ぶ』」『高崎経済大学論集』第63巻第3・4合併号。